

意外と知らない？ 外用薬・自己注射薬

外来診療での適“剤”適所

「良薬口に苦し」というが、薬と言えば、口に入れる内服薬のイメージが強いと思う。内服薬は、その使用方法が「飲むだけ」であり、味や飲みにくさとか、剤形にしても、カプセルか口腔内崩壊錠かなど想像しやすいと思うが、注射薬や吸入薬、外用薬は意外とイメージしにくいかもしれない。今回の特集は「外用薬・自己注射薬」であり、疾患や診断といったカテゴリーには入らない、薬の剤形に注目した異色の特集になっているのではないだろうか。

テーマは、「適“剤”適所」で、内服薬以外の薬の適応と使い方である。坐薬や湿布など市販薬としても、一般診療でもよく使用されるものから、自己免疫疾患やアナフィラキシーなど特殊な病態で使うものまで、その対象となる幅は非常に広い。医師は処方箋を渡すが、薬を直接渡すわけではない。患者さんは実際に手にとって薬を使用することになるが、医師と患者さんとで薬に対する認識のギャップもあるかもしれない。また、注射薬管理など看護師や薬剤師が中心となって薬の使い方を指導しているものも多くある。医師が知っているようで、意外と知らないこともあるのではと、気がつくきっかけになればと思う。

昔話になるが、個人的な経験にお付き合いいただきたい。アナフィラキシーに対するアドレナリン自己注射薬エピペン[®]がまだ保険適用となる前（2011年9月から保険収載）に、薬剤師や看護師と一緒に、適応となる患者の来院から実際にエピペン[®]を持って帰宅するまでのマニュアル、フローチャートを作ったことがある。今ではガイドラインなどで学ぶことは容易になっているが、「エピペン[®]は打ったら5つ数える」「打つ前には救急車を呼んで、その後打つように（打った後でも病状が悪化することがあるので）」など、当時の製薬会社のマニュアルにはない運用方法を独自に作っていた。薬を実際に患者さんが使えるようにするためには、かなり細かな注意、さらに多くの関係者の努力と患者さんの理解が必要なことをこのとき改めて実感した。また、

注射薬を見せながら説明する機会をもてたことは、患者さんの疾患や手技に対する不安を直接知る機会にもなった。

本特集では、各分野のエキスパートが日常診療で困りがちな外来診療における外用薬、自己注射薬の適応から上手な選び方について、エビデンスを交えわかりやすく解説している。さらに医師だけでなく、患者さんにより近い立場で実際に患者指導を担当している薬剤師にも執筆を依頼した。内服薬以外の薬を使うときには、本書の内容を思い出して臨床に役立てていただければ幸いである。

薬の剤形に注目という、よくある切り口ではない本特集に対して、快く執筆を引き受けて、わかりやすくまとめていただいた執筆者の方々、また、不慣れな編集作業に全面的にバックアップいただいた「medicina」編集委員、編集室の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。



本村 和久

沖縄県立中部病院 総合診療科